

翻訳語が物語る近代中国の東西言語文化交流

書評：千葉謙悟著『中国語における東西言語文化交流 近代翻訳語の創造と伝播』

塩山正純

本書は古屋明宏教授による前書きで紹介されているように、中国語の地名・人名の表記を中心とした音訳語、外来語を分析対象として、19世紀から20世紀初頭にかけての東西言語文化交流について論じたもので、序論の先行研究の概観と問題設定、第一部の方法論、第二部の音訳語研究、第三部の意識語研究という4部立てで構成されている。主に音韻論の基礎に裏付けられる確かな問題設定と方法論の提示、そして具体論への展開へと続く丁寧な構成だけを見ても、氏の日頃の研究への真摯な姿勢とその手堅さが伺える。失礼を顧みないで申し上げれば、何より本書は読み物としても頗る面白い一冊である。

まず、序章で読者は近代東西言語文化交流における翻訳語に関する研究史のあらましを知ることができる。著者によれば、研究史の概観は主に氏の博士論文の時点までの動向をまとめたもので、沈国威教授、荒川清秀教授、朱京偉教授の著作はもとより、主要な研究とその概要についてほぼ網羅されている。執筆時点から現在まで数年間の成果については補綴すべきことが多々有るとのことであるが、翻訳語からアプローチした近代東西言語文化交流の研究に興味ある者にとっては、この序章だけでもまず一読すべき基礎文献であると言える。

第一部で著者は研究に不可欠な方法論そのものを議論の対象にする。第一章では、近代言語文化交流において成立した翻訳語のパターン分類を、翻訳方法などの従来型の分類を踏襲せず、翻訳語の創造者に着目し、新たにその出自によって、中国人による新造・転用、回帰語、日本語固有の漢字語、来華外国人、アルファベットの5分類を提案したところが特徴的である。評者が愛する日本の伝統演劇の世界では、一見目新しくも独りよがりなことを「型無し」と評する一方で、伝統を消化したうえで自分なりのオリジナリティを発揮することを「型破り」といって賞賛する。従来の蓄積を消化した上で、新たな典拠と考察に基づいた氏ならではの個性的な提案は、まさに「型破り」である。ただ、少々申し添えておきたいのは、近代語のパターンにアルファベットを入れていることへのちょっとした違和感、そして来華外国人とその周辺と

してサポートした中国人スタッフの働きをキーワードに反映させてはどうか、ということである。

続いて第二章では、徐継畚の『瀛環志略』とマルケスの『新釈地理備考』の翻訳語のうち、主に外国の地名を検証例として、音訳語の基礎方言判定の方法論について論じている。前者は広く漢字文化圏の音訳語形に影響を及ぼし、また後者はその主要な資料となった文献である。著者は音訳語に充てられた漢字のうち、方言間で読音の差異が大きいものに着目し、中古音という日母字や入声字と原語との対音関係の検討を切り口にする。具体例の考察の結果として、例えば『新釈』は声母、韻母のいずれから見ても官話を基礎とした可能性が高いという。特に声母の「日」や「惹」が使われている「日巴拉爾大(ジブラルタル Gibraltar)」「惹爾日亜(ジョージア Georgia)」など15の地名の用例では、粵語音の[j]よりも官話音の[z]の方が、原語の摩擦音や破擦音の対音として、より相応しいことを指摘する。そして、著者は、具体例の検討によって、個別の事象で要素を満たす方言の存在も肯定したうえで、やはり全体的には「『瀛環志略』の音訳語に関して指摘した現象は官話音によつてのみ同時に説明できる」と纏める。マルケスはもとよりリッチ以来のカソリックには官話志向の傾向があり、また徐継畚の「強い『正音』意識」に代表されるように、翻訳語創造における官話の採用は、かなり早い時期から存在感を示しており、これまで漠然とイメージされてきたほどに、粵語音が音訳語の基礎方言としての優位を持っていなかったのである、という指摘には説得力がある。たしかな音韻論の含蓄に基づいた粵語音と官話音の読音対照の検証によって、音訳語の基礎方言に関する研究者の認識は、これまでの粵語優位というイメージ偏重の推測の域を脱したと言えよう。著者はまた、当時の推定音に拠って方言間差異の大きい漢字音を扱い、音訳語の定着年代を確定し、通時的な層を明確化することの必要性についても提言しているが、これからさき、個々の音訳語についての研究が進めば、著者の方法論が持つ普遍性がより確かに立証されて行くような気がする。なお、第二部、第三部での個別の事象に対する緻密かつストーリー性豊かな考察は、いずれも本章で提唱する理論に基づいて展開されるのである。

第二部は音訳語についての物語であり、第一章は著者自らが「基礎方言シフト」と名付ける翻訳語創造の基礎方言に関する考察が展開される。著者は、単に語形変化の羅列に終始することには意味が無いと喝破し、一貫して公文書や学術書の用例とその前後の文脈や周辺の事情から音訳語創造の背景にせまる姿勢を崩さない。まず、原語との対音に着目して、アメリカやフランスといった国名の中国語表記が、広東語音から呉音へ変化している様子を数多くの具体例によって提示する。ちなみに、現代人にも馴染みある“英吉利(イギリス)”のように基礎方言間の差異が小さかった音訳語は、例外的に生き残ったということである。著者はさらに当時

の翻訳出版事情にも目を向ける。近代の中国では、まず広州が言語文化交流の窓口としての役割を果たしたが、1842年の南京条約を経て、言語文化交流の中心地は南から北へと移動する。著者の調査によると1843年の墨海書館の開設、1845年の輪転機使用による万冊単位の出版、1860年代の美華書館の開設といった幾つかの要因によって、上海の優位が揺るぎないものになる。1848年から1898年にかけて出版された西学書561冊のうち、香港は僅か60冊でその6割が宗教関係であるのに比して、434冊じつに8割が上海で出版されたという。上海から数百冊の西学書が万単位で発信されるという事態が出現し、1850年代以降は上海が言語文化交流の中心地となり、それとイコールの関係で呉方言が翻訳語創造の基礎方言となったことは悉く、至極自然な成り行きであったであろうことを、著者が紐解く当時の翻訳出版事情が確かな説得力を以て語っている。

第二章は近代西洋の偉人の漢字表記を例に、漢字がもつ字義が音訳に与える影響について論じている。例えば、ナポレオンの「法皇帝英不冲撃破軍也」という武略にみちた性格を描写した「拿破侖」や、ワシントンの人柄を描いた「華盛頓」という表記は音と義を兼ねた最上の翻訳の例であるが、これらは基礎方言の交替の影響を被らずに生き残ったものだという。当人が漢字で名乗った訳ではないという著者の断り書きはさて置き、字義の相応しさが名前の持ち主たる西洋人による表記を尊重する中国の「名従主人（当人の自称を尊重する）」の原則と相まったときには、たとえ翻訳拠点の移動で基礎方言が交替し、漢字の見直しがあっても良さそうな状況が出来たとしても、単純に字音だけが優先される訳ではなかったということである。

第三章は上海を舞台にしたアレンの翻訳活動と中国人助手による影響の物語である。西学の翻訳では、国名や人名といった固有名詞は兎も角、あまたの専門用語の創造には非常な困難が伴い、アレンの音訳にも中国人筆記者の母方言である呉方言による干渉が常につきまತ್ತたと言う、字音統一と訳語統一に付いてまわる問題に焦点があてられる。続く第四章は基礎方言としての「土音」を取り上げている。翻訳語創造の音声面では官話、粵方言、呉方言が有力な基礎方言であることは言う迄もないが、ここで著者が強調するのは、翻訳語を扱う書物の著者の出身地や著作がターゲットとする地域の方言というファクターの重要性である。著者は北方官話の一地域である湖北を舞台にこの問題を見つめ、翻訳語の流通が、先進地域で創造されたものが無条件で周辺に拡散していく単純な図式ではなく、中国人自身が基本的には翻訳語の先進地域で創造された語彙を踏襲しつつも、地元の方言と著しく異なるものについては自方言の漢字に置換え、外国語固有名詞についても自言語のなかに取り込もうとする試みが存在していたことを実証している。

第五章は『普通百科全書』に現れる音訳語をキーワードに、漢字音に基づく音訳語の創造に

において普段あまり意識されることのない問題を扱う。ひと言に音訳語といってもその導入経路が様でなく、日中間の言語文化交流では、英語を解さぬ留日学生が担い手たる時、音訳語についても英語音から先ず日本語読みし、日本語読みから中国語に再翻訳、或はそのまま沿用したというひとつのルートの存在を浮び上がらせている。

第三部は意訳語の物語である。第一章は主として翻訳借用の問題を扱い、例えばオランダの首都 *amsterdam* (アムステルダム) を *ams+terdam* に分解するのは本来の分割線を無視した、或いはそれを知らない極めて中国人的発想であり、教育を受けた普通の西洋人にはあり得ない発想であると指摘する。言葉の翻訳で、中国人は時としてネイティブ母語話者としての常識が及ばない、原語から自国語へのスクラップアンドビルドという「力技」を以てして、よく知らない外国語を形態素にまで解体して苦勞して受け入れようとしたのである。これまで翻訳の主体としてスポットライトが当てられてきた宣教師を中心とする西洋人に加え、中国人の取巻きの果たした役割にも光を当てたことは一つの成果である。

第二章は「礦」の字音変化を軸に、近代言語文化交流において、語形という目に見える面での影響関係とは別に、読音という目に見えない間接的な影響関係、すなわち翻訳語が漢字音を変化させるという物語が存在したことを論証している。語彙「礦業」が日本で定着したのが明治初年。その10年後には日本からの影響によって中国でも「礦業」が定着する。この時点での文字列定着の確認とは別に、ここから著者は、読音の変化に関してさらに別角度からの考察が必要という慎重な持味を發揮する。著者の考察の舞台は近代中国の学制改革と実業教育とそれを担った北洋大学堂、南洋学堂といった教育機関に移る。例えば北洋大学堂はその立地に拘らず南方からの進学者が多く、成績も概ね南方出身の学生のほうが良かったらしい。在学中の学業成績は自ずとその後の進路にも影響するが、呉語圏を中心とする南方出身の質量ともに優勢な卒業生の多くが実業界で活躍し、教育に従事するものも少なくなかった。こうした呉語ネイティブによる教育界・実業界での再生産サイクルによって、「礦」の一例よろしく、北方官話が一部の漢字に呉語の読音を充てるという方言間の借用の一種の図式が形成された、と著者は解説する。この「礦」の物語は、中国における異文化吸収前線の移動の様子が手に取るように分かり、「中国語学版」歴史物語を読むようなストーリー展開にワクワクさせられる。

第三章は、今日我々にも馴染み深い「合衆国」という語の構成について論じている。著者は、当初、翻訳者が創造したときの意図は「合+衆国」でそれが漢字文化圏の住人の常識によって「合衆+国」と再分析されたものであると結論づける。その最も有力な証左として提示されるのがウィリアムズ的外交文書で、たしかにそこには「…以眾國立為一國之意……合眾國立為一國…」という件が現れる。しかし、この文脈の中でこそ動詞+目的語構造としての「合眾國」

は出現し得るのであろうが、それが果たして単独の国名であるときに「合+衆国」たり得るのだろうか。或いは評者がいかにも漢字文化圏の住人としての常識に囚われすぎているのかも知れないが、「合+衆国」という著者の説が興味深いものであるだけに、著者の説をもう一段裏付ける出典が欲しいところである。

続く第四章では、翻訳語「合衆国」が成立してから、同じく漢字文化圏にある中国と日本でどのように根付き、それぞれの言語文化に則した解釈に変化していったのかが、時系列で語られる。日本では「衆」が英華字典などからではなく、近世以前からの用法や方言という日本土着の言語文化の影響を受けて「多くの人々」と解釈されることによって、共和や民主を含意する日本版「合衆国」となっていった様子が生き生きと語られる。著者は方言での「衆」の用例のひとつに奈良の吉野を挙げているが、評者はまさに吉野のお隣り和歌山北部出身で、いかにも「人びと」を表す「衆」を話す大人に囲まれて育ってきた。日本人が「合衆国」を上述のように解釈したという著者の見解にもなるほどと頷けるのである。では「合衆国」の後継訳語である「聯邦」はどうか。

第五章では state と nation の区別に関して、ブリッジマンが state に「邦」を用いることによって、「国」を用いる nation との区別を可能にしたことを指摘する。加えて、これは 19 世紀の中国では定着せずに、日本で着実に定着したのち、20 世紀初頭に中国に回帰したことばであると言う。当時、中国が「国家が存続し得るか否か」という危機的状況にあって、目指すべき国家像としてのアメリカやドイツに言及する場合にこれが用いられたこと、そしてポスト清朝の国家のあるべき姿の構想という強い意図と密接に関わった語彙であることを著者が鋭く指摘している点は注目に値する。最初に、目標としての外国の国家像を表現し、つぎに中国そのものの将来像を語る。そして、その範囲がひとり中国だけに止まらず、周縁のモンゴル、チベットをも包含し「大きな中国」像を創造してしまう、スケールの大きな物語のキーワードとして「聯邦」が活躍する様子がよく分かる。著者のいうところの「聯邦」のもつ「中国的特徴」とは、ひとつの中華思想の現れであることを、たしかな用例が力強く物語っている。また、当時すでに明治維新を経て国家としてのかたちが固まりつつあった日本では、このような現象があまり見られなかったという点も、日中の時代背景を対照的に捉えた重要な指摘であろう。

著者が随所で強調するのは、対訳辞書の記述のみに依拠した方法が、ともすると語彙の表面的な姿形の後追いに終始し、同時代的にどのような意味で実際に使われていたかが見落とされがちなことである。著者が繰り返し強調しているように、やはり当時の実際の文章での文脈を伴った用例を丹念に検証することの必要性は、研究者たるもの誰しも心しなければならない点であろう。本書はこの道の研究者必読の一冊であり、特に若手の研究者にとっては大いに啓発

される一冊である。また、本書は個々の論文の単なる羅列になることを嫌って、とくに第二部、第三部は翻訳語成立をテーマにしたひとつのスケールの大きな物語としても成立している。本書が、研究者だけでなく、一般の読者にとっても、知識欲を満たしつつ、翻訳語を主人公とした歴史物語としてのエンターテインメント性を十分に楽しめる一冊である所以である。